

2026年 9月16日

公益財団法人 スプリックス教育財団

『基礎学力』とは何か？

日本の保護者は「知識、技能」、他9か国は「活用する力」を主に挙げる

スプリックス教育財団 国際基礎学力調査2026

公益財団法人スプリックス教育財団（本部：東京都渋谷区／代表理事：常石 博之）は、日本を含む10か国の小中学生とその保護者・学校の先生を対象に「国際基礎学力調査2026」を実施しました。本調査では『基礎学力』に着目しましたが、そもそも『基礎学力』とは何を指す言葉でしょうか。当財団は、**小中学生を子どもにもつ保護者が『基礎学力』に何が含まれると考えているかを、日本含む10か国と比較し、その認識が国によってどれだけ異なるかを調査しました。**

調査結果のポイント

① 『基礎学力』という言葉は調査10か国すべてで認知されており、多数の保護者が重要だと回答

日本含む10か国の小中学生の保護者に『基礎学力』について質問したところ、全ての国で半数以上が、時々以上の頻度で「見聞きする」と回答しました。さらに「基礎学力は重要か」と質問したところ、モロッコを除く9か国で8割以上の保護者が重要だと回答しました。

② 日本の保護者は『基礎学力』に「知識、技能」を主に挙げる

日本の小中学生の保護者に「『基礎学力』にどのような力が含まれていると思うか」と質問したところ、「読み書きの能力」（76.0%）、「計算力」（68.0%）、「主要教科の基礎知識」（64.2%）の順に多く挙げました。上位3項目はいずれも「知識、技能」にあたる力が選ばれました。

③ 他9か国の保護者は『基礎学力』に「活用する力」を主に挙げ、日本とは対照的

日本以外の9か国の小中学生の保護者にも「『基礎学力』にどのような力が含まれていると思うか」と質問しました。10か国全体では「情報を正しく理解し、活用する力」（51.0%）や「問題を見つけて解決する力」（48.3%）が上位2項目を占めており、日本以外の国では「活用する力」を多く挙げる傾向がありました。『基礎学力』に含まれる上位3項目が揃って「知識、技能」にあたる力だったのは、10か国で日本だけでした。

調査の背景

『基礎学力』という言葉聞いたことのある方は多いのではないのでしょうか。ただし、それが何を指すかは、**時代によって変遷している**ようです。1958年の学習指導要領改訂では「**基礎学力の充実**」が明確に掲げられ、その具体策は**国語と算数の充実**でした [1]。その後、行政の文書では、**知識や技能に加えて思考力などの活用する力や学ぶ意欲**までを含める形で学力が整理されるようになりました [1][2]。学問の世界でも、『基礎学力』を一義的に定義することは**誰にとっても不可能**だと指摘されています [3]（詳しくは付録「補足：学力と基礎学力の捉え方の変遷」をご覧ください）。

それでも、「**基礎学力は重要だ**」という意見には、多くの人が同意するかもしれません。しかし『基礎学力』と聞いて、**皆さんは何を思い浮かべるでしょうか**。この答えは、**時代や国、さらには一人ひとりによって異なる**可能性があります。もし「基礎学力が重要だ」という一言が、話し手ごとに別のものを指しているなら、学校が家庭に伝えるときも、国際的に議論するときも、**期待はずれ違ったまま進む危険があります**。

そこで本調査では、**日本を含む10か国の、小中学生の子どもを持つ保護者**に「基礎学力は重要か」と尋ねた上で、「**基礎学力に含まれる力は何か**」を質問しました。「基礎」「基本」という観点で**各国の学力観を浮き彫りに**することが目的です。

調査方法

- 【調査時期】 2026年4月～8月
- 【調査対象国】 日本、フィリピン、インドネシア、ベトナム、タイ、キルギス、ケニア、エジプト、モロッコ、ペルー（国の選定については「調査対象の選定について」参照）
- 【調査対象者】 小学4年生、小学5年生、中学2年生、および中学3年生に相当する子ども（以下、小4、小5、中2、中3、あるいは小中学生）の保護者。
- 【サンプル数】 保護者：3,547人（2026年9月1日時点）
国別の回答数は表1参照。
- 【調査主体】 公益財団法人スプリックス教育財団が株式会社スプリックスに委託して実施
- 【調査方法】 1学年あたり1～数校の学校および自宅での調査。保護者の回答は任意。

※ 本調査は2026年4月から8月にかけて実施しており、本報告は2026年9月1日時点で回収済の回答を集計したものです。最終的な集計では、数値が変動する場合があります。

※ 一部の国では、小6・中1を対象に含んでいます。（小6：タイ、中1：インドネシア、モロッコ）

※ 当調査では小中学生および学校の先生にも調査を行っていますが、本報告では保護者の回答のみ扱います。

※ 図で使用している百分率（%）は小数第2位を四捨五入して算出しています。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合があります。

※ 本リリースに関する内容をご掲載の際は、必ず「スプリックス教育財団調べ」と明記してください。

注：調査対象の選定について

本調査は、株式会社スプリックスが実施した国際基礎学力検定TOFASを、調査時期の期間内に受験した者のうち、有志の学校を対象としています。そのため、基礎学力の向上に課題を感じている国を中心とした調査結果です。また、回答者はランダムに抽出されたものではありません。そのため、便宜上「国名」として記載していますが、特定の地域や学校の結果であることにご留意ください。

調査結果

①『基礎学力』という言葉は調査10か国すべてで認知されており、多数の保護者が重要だと回答

『基礎学力』という言葉はどの国でも認知されているのでしょうか。日本含む10か国の小中学生の保護者に「あなたの国で『基礎学力』という言葉をご存知ですか。」「と質問しました（図1）。10か国全体では、**74.9%の保護者が時々以上の頻度で『基礎学力』という言葉を見聞きする**と回答しています（「とてもよく」「よく」「時々」の合計）。国別に見てもインドネシアを除く9か国で7割以上の保護者が時々以上の頻度で見聞きするようです。

ではその『基礎学力』をどの程度重視しているのでしょうか。同じ10か国の保護者に「お子様の将来にとって、基礎学力はどの程度重要だと思いますか？」と質問しました（図2）。10か国全体では、**90.1%の保護者が「基礎学力は重要だ」と答えました**（「とても重要」「重要」の合計）。国別にみると、モロッコを除く9か国で8割以上の保護者が基礎学力を重視していることがわかりました。

調査した10か国では、『基礎学力』という言葉はある程度一般的であり、**多くの国で小中学生の保護者は「基礎学力は重要である」という意識を持っている**ようです。

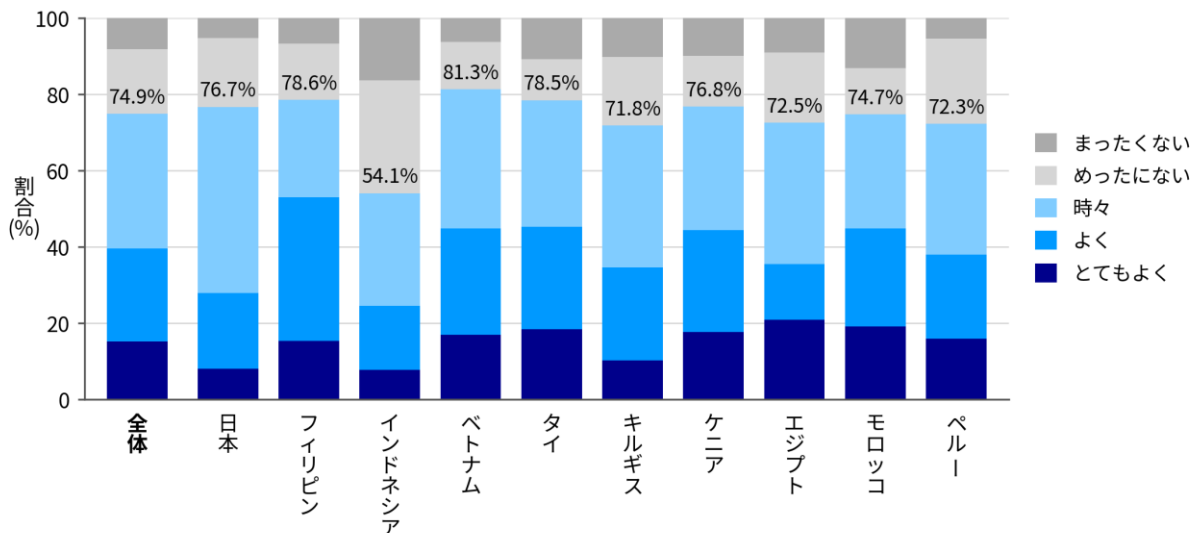


図1：基礎学力の認知（小中学生の保護者、10か国）

「あなたの国で『基礎学力』という言葉をごどれくらい耳にしたり目にしたりしますか。」という質問への10か国の小中学生の保護者の回答。選択肢は、とてもよく見聞きする/よく見聞きする/時々見聞きする/めったに見聞きしない/まったく見聞きしないからひとつ選択。図中のラベルの数値は、「とてもよく」「よく」「時々」の合計。全体は10か国の単純な合計で、国によるサンプル数の差を考慮していない。

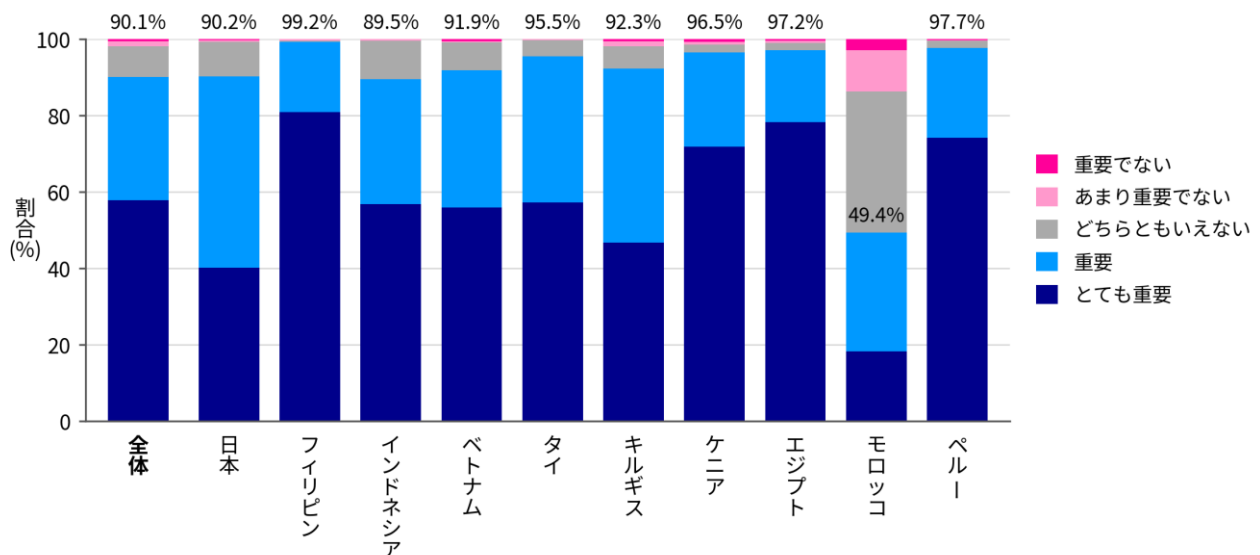


図2：基礎学力の重視（小中学生の保護者、10か国）

「お子様の将来にとって、基礎学力はどの程度重要だと思いますか？」という質問への10か国の小中学生の保護者の回答。択一。図中のラベルの数値は、「とても重要」「重要」の合計。全体は10か国の単純な合計で、国によるサンプル数の差を考慮していない。

② 日本の保護者は『基礎学力』に「知識、技能」を主に挙げる

では、その「重要な基礎学力」とは、どのような学力を指しているのでしょうか。まずは、日本の保護者の回答を見ていきます。日本の小中学生の保護者に「『基礎学力』には主にどのような力が含まれていると思いますか。」と質問しました（図3）。

日本では「読み書きの能力」と答えた保護者が最多で76.0%、次いで「計算力」（68.0%）「主要教科の基礎知識」（64.2%）と続きました。調査の背景で示した文部科学省の定義に照らすと、これら3つはいずれも「知識及び技能」にあたります[1]。一方、他の選択肢は「活用する力」や「学習意欲」にあたるものです。日本の保護者は「活用する力」や「学習意欲」よりも「知識、技能」を『基礎学力』だと捉える傾向にあることがわかりました。

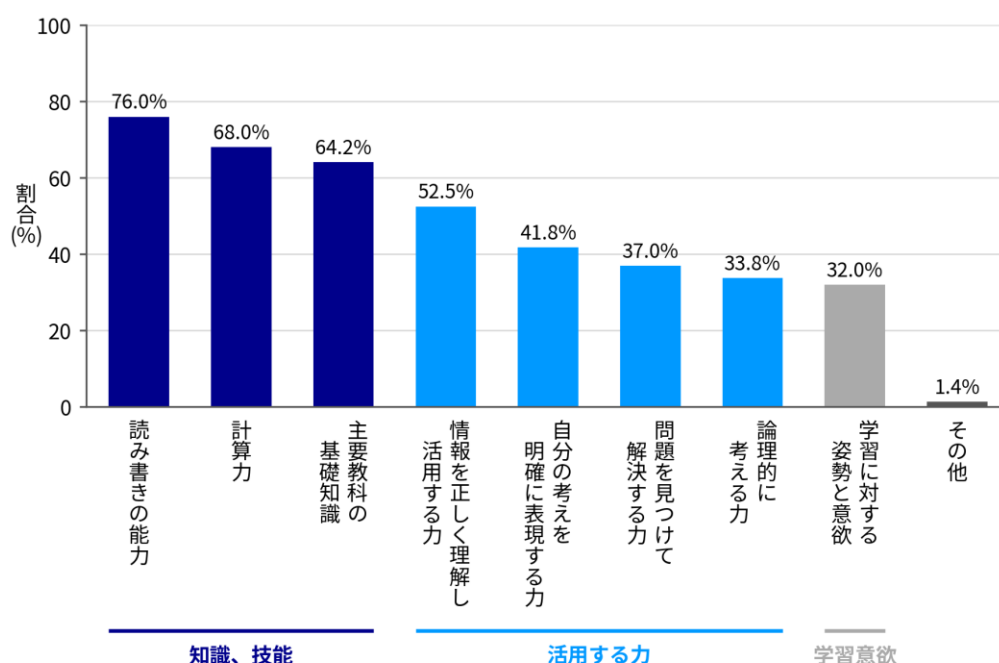


図3：基礎学力に含まれる力（小中学生の保護者、日本）

「『基礎学力』には主にどのような力が含まれていると思いますか。」という質問への日本の小中学生の保護者の回答。複数選択。この設問では、前問で「まったく見聞きしない」と答えた回答者にも、言葉の響きや意味から想像して回答するよう求めている。

③ 他9か国の保護者は『基礎学力』に「活用する力」を主に挙げ、日本とは対照的

それでは、他の国では「重要な基礎学力」がどのような学力を指しているかと認識されているのでしょうか。日本含む10か国の保護者に「『基礎学力』には主にどのような力が含まれていると思いますか。」と質問しました（表1）。

10か国全体で見ると、最多が「情報を正しく理解し、活用する力」（51.0%）、次いで「問題を見つけて解決する力」（48.3%）でした。ただし「その他」の選択肢を除くと39.9%～51.0%とその選択率の幅は小さく、一つの選択肢に回答が集中せず分散しているように見えます。

しかし国別に見ると明確に認識の差がある学力があります。まず、日本の回答がもっとも特徴的でした。②で見たとおり、日本の保護者が多く挙げたのは「読み書きの能力」「計算力」「主要教科の基礎知識」です。この3項目は、いずれも10か国のなかで日本の選択率が最も高いものでした。さらに、上位3項目が揃って「知識、技能」にあたる力なのは、調査した10か国の中では日本だけです。逆に「活用する力」にあたる項目では、日本の選択率は「情報を正しく理解し、活用する力」が10か国中4位につくほかは、「自分の考えを明確に表現する力」が7位、「論理的に考える力」が8位、「問題を見つけて解決する力」は9位でした。

その他を除く各回答の差の大きさも日本が最大でした。「その他」の選択肢を除き、日本で最も多く選ばれた「読み書きの能力」（76.0%）と、最も選ばれなかった「学習に対する姿勢と意欲」（32.0%）の差は44.1ポイントです。次に差が大きいのはエジプトの36.5ポイント、次いでキルギスの28.2ポイントで、他の7か国は8～21ポイント差です。日本は他の国と比べると差が大きく、特に「知識、技能」を基礎学力だと認識していることがわかります。

日本以外の国では、最も多く『基礎学力』として選ばれた力は、「活用する力」でした。「論理的に考える力（インドネシア・キルギス）」「問題を見つけて解決する力（ベトナム・ペルー）」「情報を正しく理解し、活用する力（タイ・エジプト・モロッコ）」「自分の考えを明確に表現する力（フィリピン・ケニア）」がそれぞれ一番多く選択されています。2位や3位を見ても「知識、技能」よりも「活

	国名	全体	日本	フィリピン	インドネシア	ベトナム	タイ	キルギス	ケニア	エジプト	モロッコ	ペルー
	N数	3,547	438	266	220	663	353	156	142	211	344	754
知識、技能	読み書きの能力	47.3%	76.0%	66.2%	32.7%	49.9%	46.5%	34.0%	38.0%	51.7%	16.0%	44.0%
	計算力	45.3%	68.0%	61.3%	36.8%	53.5%	39.9%	36.5%	36.6%	53.6%	20.6%	36.5%
	主要教科の基礎知識	45.8%	64.2%	56.0%	26.4%	58.7%	47.0%	35.9%	43.0%	49.3%	20.3%	38.7%
活用する力	情報を正しく理解し活用する力	51.0%	52.5%	69.5%	45.5%	57.9%	49.0%	51.3%	40.8%	73.9%	23.0%	48.3%
	自分の考えを明確に表現する力	47.3%	41.8%	72.2%	37.7%	59.6%	39.1%	51.9%	47.9%	64.5%	17.2%	45.5%
	問題を見つけて解決する力	48.3%	37.0%	68.8%	43.2%	61.4%	45.0%	44.9%	40.8%	69.7%	17.7%	49.2%
	論理的に考える力	43.5%	33.8%	62.0%	47.3%	56.1%	30.9%	62.2%	44.4%	61.6%	14.8%	40.5%
学習意欲	学習に対する姿勢と意欲	39.9%	32.0%	54.5%	36.4%	51.1%	38.0%	47.4%	38.7%	37.4%	14.8%	42.4%
	その他	4.3%	1.4%	7.5%	4.1%	5.4%	5.4%	1.3%	2.1%	2.8%	3.8%	4.9%

1位
 2位
 3位
 ※「その他」は順位づけから除外

表1：基礎学力に含まれる力（小中学生の保護者、10か国）

「『基礎学力』には主にどのような力が含まれていると思いますか。」という質問への10か国の小中学生の保護者の回答。複数選択。この設問では、前問で「まったく見聞きしない」と答えた回答者にも、言葉の響きや意味から想像して回答するよう求めている。国ごとに、選択率の上位3つを濃さの違う青で示した。全体は10か国の単純な合計で、国によるサンプル数の差を考慮していない。

用する力」を挙げる傾向にありました。ただし、タイやモロッコでは2位と3位に「知識、技能」にあたる力を挙げるなど、必ずしも「活用する力のみ」を『基礎学力』と捉えているわけでもないことがわかります。「**学習意欲**」が3位までに入る国は日本含めてありませんでした。

日本以外の9か国では、3位までが「活用する力」で占められていたのはフィリピン・インドネシア・キルギス・エジプト・ペルーの5か国、「知識、技能」と「活用する力」が混在していたのはベトナム・タイ・ケニア・モロッコの4か国でした。『**基礎学力**』に含まれる学力の認識は、国によってさまざまであることがわかりました。

まとめ

『**基礎学力**』という言葉は、10か国すべてである程度聞き馴染みがある言葉であり、「**基礎学力は重要だ**」という意識は、モロッコを除く9か国の保護者で共有されていました。

しかし、『基礎学力』に何が含まれるかは、国によって意見が分かれました。日本の保護者は「読み書きの能力」「計算力」「主要教科の基礎知識」を多く挙げました。**上位3項目がすべて「知識、技能」にあたる力だったのは10か国で日本だけです。他の9か国では「情報を正しく理解し、活用する力」や「問題を見つけて解決する力」といった「活用する力」を上位に挙げる傾向がみられました。**

この結果は、「**基礎学力が重要だ**」という合意が、その中身の合意を意味しないことを示しています。国際的に議論するときはもちろん、学校が家庭に伝えるときにも『基礎学力』と言うだけでは通じ合えない可能性があり、**議論のたびに何を指しているのかを添える必要**があります。

また、日本の保護者が「読み書きの能力」「計算力」「主要教科の基礎知識」を挙げる割合は10か国で最も高く、一方で「自分の考えを明確に表現する力」や「問題を見つけて解決する力」は下位でした。『基礎学力』という言葉が結びつく先が、他の9か国とは異なっています。『基礎学力』に含まれる力は、行政でも学術研究の議論でも広がってきています。しかし、**日本の保護者の回答は教育学の文脈で「伝統的」なものと位置づけられている「読み書き計算を基礎学力とする見方」[3]に近いものとなりました。**

では、『基礎学力』の捉え方と学力に関係があるのか、また、その『基礎学力』をどう伸ばしていくのか。スプリックス教育財団では、計算テストの結果との集計も踏まえて、今後、詳細な分析を進めてまいります。

参考文献

- [1] 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』2017年7月（1958年改訂については同書「（資料）学習指導要領等の改訂の経過」）
- [2] 教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）」2000年12月4日
- [3] 東京大学学校教育高度化センター編『基礎学力を問う ― 21世紀日本の教育への展望』東京大学出版会、2009年（第1章 佐藤学「学力問題の構図と基礎学力の概念」）

ニュースリリースに関するお問い合わせ先

公益財団法人スプリックス教育財団 担当 : 調査窓口 秦・三村

所在地 : 〒150-6222 東京都渋谷区桜丘町1-1 渋谷サクラスステージSHIBUYAタワー22F

URL: <https://sprix-foundation.org/> E-mail: survey@sprix-foundation.org

付録

調査方法の詳細

株式会社スプリックスが実施した国際基礎学力検定TOFASを、調査時期の期間内に受験した者のうち、有志の学校を対象とした。児童・生徒は学校の教室にて、保護者は自宅等で、学校の先生は学校等で、WEB（パソコン・タブレット・スマートフォン等）により回答した。

備考：調査項目 ※今回報告した項目のみ記載

質問文1：日本の教育には「基礎学力」という考え方があります。

あなたの国で「基礎学力」という言葉をどれくらい耳にしたり目にしたりしますか。

もっともあてはまるものを1つだけ選んでください。（保護者向け）

選択肢：とてもよく見聞きする/よく見聞きする/時々見聞きする/めったに見聞きしない/まったく見聞きしない

質問文2：お子様の将来にとって、基礎学力はどの程度重要だと思いますか？

もっともあてはまるものを1つだけ選んでください。（保護者向け）

選択肢：とても重要/重要/どちらともいえない/あまり重要でない/重要でない

質問文3：「基礎学力」には主にどのような力が含まれていると思いますか。

あてはまるものをすべて選んでください。

前の質問で「まったく見聞きしない」と答えた方も、言葉の響きや意味から想像してお答えください。

（保護者向け）

選択肢：読み書きの能力/計算力/主要教科の基礎知識/論理的に考える力/問題を見つけて解決する力/情報を正しく理解し、活用する力/自分の考えを明確に表現する力/学習に対する姿勢と意欲/その他

補足：学力観の変遷

1. 「学力」も「基礎学力」も、一つに定まっていない

「学力」という言葉は、英語の **achievement** の訳語として成立しました。ただし「力」という文字が入ったことで、元の英語とは異なる意味とイメージを持つようになり、多様な学力観が語られるようになったと指摘されています [3]。教育学者の佐藤学氏は2009年に、『学力』や『基礎学力』を一義的に定義することは誰にとっても不可能だと述べています [3]。そして、この揺れは、**日本語だけの問題ではありません**。何を学力とみなすかは、**国際的にも一つに定まってきません**でした。

2. 国外では何を学力として測ってきたか

国を越えて学力を比べる試みは古く、**1958年に国際教育到達度評価学会（IEA）の創立会合**が開かれ、**1964年には12か国が参加する第1回国際数学調査**が実施されました [4]。のちのTIMSSはこの流れをくむもので、文部科学省もTIMSSを「1964年から実施」と説明しています [5]。

同じころ、何を「できる」とみなすかも広がりました。**1965年のユネスコ世界教育大臣会議**は、識字を読み書きの技能そのものではなく「社会的・市民的・経済的役割に人を備えさせる手段」とみなすべきだとし、1978年に採択された「**機能的識字**」の定義は、自分と地域の発展のために読み・書き・計算を使い続けられることを求めています [6]。**読み書きができるかどうかから、それを社会で使えるかどうかへ**、基準が動いたことになります。

学力調査にも、この違いが現れます。先述したTIMSSは1995年から4年ごとに、学校のカリキュラムで学んだ知識や技能がどの程度習得されているかを測っています。**2000年に始まったPISA**は、義務教育修了段階の15歳を対象に3年ごと、知識や技能を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活

用できるかを測ります [5]。同じ「学力」を測る調査でも、**習ったかを見るか、使えるかを見るか**で、対象が異なります。

さらにOECDは**1997年からDeSeCo（コンピテンシーの定義と選択）プロジェクト**を進め、2003年に「相互作用的に道具を用いる」「異質な集団で交流する」「自律的に活動する」という**3つのキー・コンピテンシー**を整理しました [7]。教科の枠を超えて、何ができるようになるべきかを示したものです。本調査の対象国でも、**ペルー（2016年）、ケニア（2017年）、ベトナム（2018年）、キルギス（2022年）**が、コンピテンシーを基盤とする教育課程を導入しています [8]。

3. 国内では何を学力として測ってきたか

日本で現在行われている全国的な学力調査は、**2007年に始まった全国学力・学習状況調査**です。当初は主として「**知識**」を問う問題と、主として「**活用**」を問う問題に分かれており、2019年度から一体的に問う形へ改められました [9]。ただし、**これが日本で最初の全国調査ではありません**。文部省は1956年から1966年にかけても全国学力調査を行っており、1961年からの4年間は全国の中学校を対象とする悉皆調査でした [10]。特定の学年のすべての児童生徒を対象とする調査としては、2007年の開始は**43年ぶり**のことです [9]。国際比較調査が動き出したのと**ほぼ同じ時期**に、日本でも全国規模で学力を測る試みが始まっていたことになります。

4. 『基礎学力』の立ち位置

全国学力調査が行われていた1950～60年代は、『基礎学力』という言葉が行政文書に明記された時期でもあります。**1958年の学習指導要領改訂**では「**基礎学力の充実**」が明確に掲げられ、その具体策は**国語と算数の充実**でした [1]。その後、**2000年の教育課程審議会答申**は「基礎・基本には、知識や技能だけでなく、自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力なども含まれる」としています [2]。2008年の改訂ではPISAが測るような「活用する力」が取り入れられ [11]、**2017（平成29）年の改訂**では、「生きる力」をより具体化する形で、以下の三つの柱が示されました [1]。

1. 知識及び技能（何を理解しているか、何ができるか）
2. 思考力、判断力、表現力等（理解していること・できることをどう使うか）
3. 学びに向かう力、人間性等（どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか）

なお現行の学習指導要領解説の本文に『基礎学力』という語は登場せず、「**基礎的・基本的な知識及び技能**」と表現されています。

5. 本調査の結果と重ねると

本調査の対象国のうち、ケニアの教育課程は7つの核となるコンピテンシーを掲げ、その第一に「**Communication and Collaboration（意思疎通と協働）**」を置いています。ベトナムの教育課程は、汎用的なコンピテンシーの一つに「**問題解決と創造**」を挙げています [8]。本調査でケニアの保護者が最も多く挙げたのは「**自分の考えを明確に表現する力**」、ベトナムでは「**問題を見つけて解決する力**」でした。

日本も2017年の改訂で資質・能力の三つの柱を示しており、**制度が向かう方向は各国と大きく変わりません**。一方、本調査で日本の保護者が多く挙げたのは「読み書きの能力」「計算力」「主要教科の基礎知識」でした。これは1958年に「基礎学力の充実」として掲げられた国語と算数に近く、**読み書きや計算を『基礎学力』とする見方が、いまでも根強く残っていること**をうかがわせます。

参考文献

- [1] 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』2017年7月（1958年改訂については同書「（資料）学習指導要領等の改訂の経過」）
- [2] 教育課程審議会「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）」2000年12月4日
- [3] 東京大学学校教育高度化センター編『基礎学力を問う ― 21世紀日本の教育への展望』東京大学出版会、2009年（第1章 佐藤学「学力問題の構図と基礎学力の概念」）

- [4] International Association for the Evaluation of Educational Achievement (IEA) 「History」 「Earlier IEA Studies」、IEA, IEA 1958–2008
- [5] 文部科学省「国際学力調査 (PISA、TIMSS)」、同「PISA調査とTIMSS調査の概要」
- [6] UNESCO, EFA Global Monitoring Report 2006: Literacy for Life, Chapter 6
- [7] OECD, The Definition and Selection of Key Competencies: Executive Summary, 2005
- [8] 各国の教育課程文書 (ケニア Basic Education Curriculum Framework, 2017/ベトナム Chương trình giáo dục phổ thông, 2018/ペルー Currículo Nacional de la Educación Básica, 2016/キルギス 学校普通教育国家教育スタンダード, 2022)
- [9] 文部科学省「全国学力・学習状況調査の概要」、『平成18年版 文部科学白書』
- [10] 国立教育政策研究所「過去のテスト資料 (全国学力調査 1956～1966年度)」
- [11] 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」2008年1月17日

スプリックス教育財団および調査会社の説明

公益財団法人スプリックス教育財団 (<https://sprix-foundation.org/>)

公益財団法人スプリックス教育財団では、金銭的な理由による学習機会の喪失を防ぐため、支援を必要とする若い世代への奨学金の支給を行います。また調査研究事業として、教育の側面から諸問題に対する調査・研究を行い、これらの問題を社会で考える足掛かりを提供したいと考えています。

東京本部：東京都渋谷区桜丘町1-1 渋谷サクラステージSHIBUYAタワー22F

株式会社スプリックス (<https://sprix.inc/>)

株式会社スプリックスは、生徒に自信を与え、学習能力を高めることで将来の見通しを向上させることを使命として、1997年に日本で設立されました。業界トップクラスの個別指導塾「森塾」、AIを活用した「自立学習 RED」、オンライン個別指導塾や教材の開発、基礎学力の調査・研究事業などを展開しています。

国際基礎学力検定TOFAS (<https://tofas.education/jp/>)

TOFASは、世界各国で実施されているグローバルなオンライン検定試験です。国際的な実施により、児童・生徒や教育機関にとって世界レベルでの比較が容易になり、グローバル化時代における貴重な知見となっています。

実績：実施した国数56か国、受験者数1500万、学校数6000校以上。現在21言語以上に対応しています。(2026年時点)